

## ペチカで薪を焚く

2020/4/5 船木幹也

私は1931年当時日本領だった樺太豊原に生まれました。父が樺太庁の役人だった関係で私はものごころ付いて以来ずっと官舎住まいでした。そしてその官舎にはどれにもペチカが付いていたのです。私が小学5年生まで住んだ官舎は二戸建てでしたが、四間取り平面の交差部を卍型に三尺ずらしそこにレンガ造のペチカがはめ込まれており、どの部屋にも三尺幅の分だけペチカの面が出るという、設計はよかったです。このペチカは我が家では全然使われていませんでした。

この官舎は亜寒帯の樺太にあって、基礎は東石建て、外壁下見板張り、内部は土塗り壁に漆喰塗りの真壁、杉の竿縁天井、窓も側板1枚で持ち出された出窓に引違いガラス窓1枚が入っているだけです。防寒に対する配慮が全くされていない内地の家そのままの建物だったのです。

当然ペチカのような低温輻射暖房で、それも全室暖房するなど不可能、日常的には茶の間に貯炭式石炭ストーブを置いて、長い冬をストーブを真っ赤になるほど焚いて暖を取る生活をしていました。辺りには同じ造りの二戸建て官舎がずらりと並んでいましたが、冬には家にも軒先一面に大きな氷柱がぶら下がっていました。各家でストーブが真っ赤になるほど焚いた熱は、部屋を暖めるようには使われず、殆どは屋根裏に逃げ屋根の雪を溶かすために使われていたわけです。

1942年に移った官舎は一戸建ての新築官舎でした。この頃になると流石に樺太にあってでも防寒住宅の必要性について説かれることが多く、既に1938年の「樺太庁報」にも「住宅を樺太向きに」という記事が載るようになっていました。

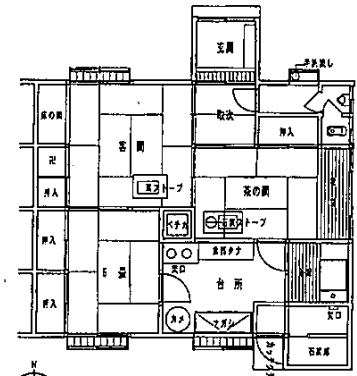
新しい官舎は外周にコンクリートの布基礎が回り、外壁モルタル塗り、窓は出窓がなくなり、外付けの外窓の内側には障子風の棧が入った型ガラス窓が入った二重窓になり、以前の官舎に比べ格段に機密性が高まっていました。そして、この家のペチカは、レンガ積みの円筒形ペチカの外側を鉄板で巻いたペチカでした。径4尺ほど銀色のアルミニウム塗料が塗られており、図のように8畳の茶の間と子供室との境に据え付けられて、この二部屋を暖房できるようになっていました。ただ茶の間は部屋全体が暖かでしたが、子供室はすぐ隣の非採暖室の客間から襖を通し冷たい隙間風がどんどん入ってくるので、子供たちは勉強机をペチカの前に持ってきてペチカに背中を付けて勉強していました。

それでもこのペチカは二部屋を暖めるには何とか間に合って、我が家でも重宝して使っていました。これは以前の家に較べて建物の気密性が幾らかは良くなっていたことが幸いしていたからです。

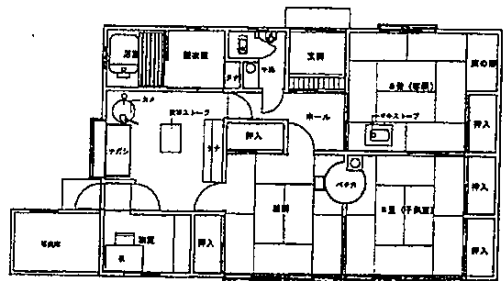
以上、私が樺太で過ごした時代、ペチカと関わった記録です。

樺太から引き揚げ後、私は主に札幌を中心に生活してきました。そして、北大の建築工学科を卒業後、ずっと建築設計を業として働いていたのです。

何時でしたか「中谷宇吉郎随筆選集」の中の随筆「生活の実験」を読んだことがあります。中谷宇吉郎は1939年(昭和14年)札幌市南4条西16丁目に自宅を実験住宅として建てました。そして、そ



8条の家



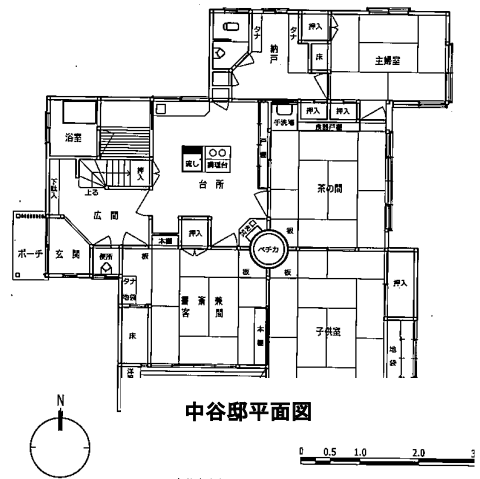
6条の家

の自邸の設計についてこのように述べています。

北海道の家は、ほとんど皆内地の家をそのまま映したものである。床や天井の構造も勿論そのままであって、例えばどの家もガラス戸1枚で零下十数度の寒気を遮断しようとしているのである。その他にも特に防寒のために意を用いたというような点はほとんど見られない。……今まで寒地の生活に適した日本人の住宅というものが、まるで研究されていないとしたら、自邸の新築に際し、大したお金を掛けなくて、ちょっとした改良のような試みをしてみよう。

自邸新築にあたり、物理学者中谷宇吉郎が考えたことは、

1. 断熱材がない時代にあって、建物の各部からの熱の放散を防ぐには、家の外気に接する面をできるだけ小さくする。それには円い家が一番良いが、そうもいかないの、なるべく真四角な家で我慢する。
2. 家全体を暖房して均一な温度にできない以上、室内の温度差はどうしても防げない。そうすると廊下があると熱対流が起き熱の逸散が起きる。この影響はかなり大きいので、平面的には廊下は全廃ということに決めた。
3. 南側は全部硝子戸にするとして、窓からの熱損失を少なくするように、窓には防寒雨戸を内側に入れ、熱の逸散を防ぐ工夫をする。
4. 北海道では冬のことを考えると椅子卓の生活が適しているが、日本式を採用する。例えば8畳の座敷に5,6人の客は通せるが、8畳の洋間に応接セットを入れると3人の客でも窮屈である。日本趣味はお金が掛からない、大学の職員などには最も適した趣味である。
5. 暖房方式としてペチカを利用し、厳寒でも昼夜を通じて室内を一定の温度に保つようにし、ペチカを家の真んかに置き、家中を均等に暖めることを考える。



以上のようなことを考えてできた中谷邸平面が、ここに示すものです。一見四間取りに見える交差部にペチカを配置し

それで四つの部屋を暖める方式は、私が住んだ樺太の官舎の平面と非常に類似しています。そして驚いたことに、このペチカが私が樺太で住んでいた官舎に付いていたものとまったく同じものだったのです。ただ物理学者の中谷はペチカが銀色に塗っているのは熱的に不合理である、熱を空に逃がしているようなものですよと、全体を黒く塗り変えています。

中谷邸のペチカ暖房の実験住宅がうまくいっていると評判になり、見学者が多く訪れるようになったそうです。確かに私がそれまで分からなかった中谷邸の平面を見つけたのも、当時の全国誌であった「婦人之友」の「北国の暖かい住宅」という中谷邸の紹介記事からです。そして、写真を見た限りでは、建物全体が大きな切妻屋根で覆われていて、戦後北海道の公営住宅で普及した小屋裏利用の住宅を先取りしていたようだったのも面白いと思いました。

当時の断熱がほとんどされていない建物、何とか隙間からの熱損失を防ぐために工夫を凝らした中谷邸は、ペチカによる全室暖房とまではいきませんでした。建物全体の熱損失を減らし、室内の温度を極力少なくした効果は十分に挙げることができたのです。

1982年私は江別市文京台に自邸を建てました。コンクリートブロック造、2階建て、一部地下

付きの延188㎡、外断熱の住宅です。勿論この家の暖房もペチカで計画しました。ただ昔と違って家の断熱性能がまるっきり変わりました。今度こそペチカひとつで暖房できる家ができるはずです。使うペチカは最近使われている壁式ペチカです。この壁ペチカを1階の応接と和室の茶の間との境にデーンと置きました。燃料は木、石炭、コークス、バーナーが付いているので灯油も焚けます。

我が家では始め石炭を焚いていました。しかし、近所に家が建て込んでくると焚き始めの黒い煙が気になります。丁度都市の冬季間の煤煙の増加が健康上の問題になっていた時期です。ある時期からコークスに切り替えました。しかし、コークスとても煙こそ目立ちませんが非再生エネルギーを燃やし、二酸化炭素を出すことは石炭と変わりありません。それにだんだんコークスなど焚いている人が少なくなり、袋詰めコークスが簡単に手に入れることもできなくなってきたのです。そこで10年ほど前からペチカで再生可能エネルギーである薪を焚くことを始めたのです。

始めは薪屋から買っていました。薪屋の薪は大きさも揃っており、ちゃんと積んでいってはいませんが、いかにも高い。それに人任せで余り手間が掛からないというのも何となく面白くない。そんなこんななかで、友人から草薙さんを紹介され、NPO法人**苫東環境コモンズ**に参加し、間伐材の薪割りを手伝い、ささやかですが苫東の森の環境保全に関わりながら、安い薪を確保したわけです。

苫東の薪はトラックからダアッと下してそのまま帰っちゃいます。私は次の日1日掛けてこれを車庫のなかに綺麗に積み上げます。これがまず楽しい。始めに道路側に薪を積んで塞ぎ、車庫のなかにうず高く積み重なっている薪をあっちにやったり、こっちにやったりして、如何にうまく積むかを考えます。ただ積むわけではなく、車庫の真ん中に夏の間カミサンが訪れた人とお茶を飲むスペースも確保し、且つ冬になって薪をうまく順番に燃やしていくためにどうしたら良いかも考えながら……。

我が家では朝晩2回ペチカの火を入れます。1回に焚く量は真冬でも大体薪7~8本程、薪が燃えて熾きになったらカミサンが上に灰を被せて火を止めてしまいます。こうすると次に燃やすときに灰を掻き出すと熾きは消えないで残っていますから、これに焚き付けを入れるとあっという間に又火を熾すことができるので、朝晩2回火を焚くこと自体それほど面倒なことではありません。

灰といえば木灰は肥料として使えます。石炭やコークスの灰のようにゴミとして処分する必要がなく、すべて敷地内の畑、花壇に撒いて無くなってしまいます。それどころか知らない人が木灰を分けて欲しいと訪ねてくる程です。木灰は野草の灰汁抜きや草木染のためにも必要なのです。

薪を焚くようになって我が家の暖房と食事情もがらりと変わりました。

まず炎の質が違います。薪が燃えるときには遠赤外線が出るそうです。薪の炎の動きと暖かさはコークスや灯油のそれとは絶対に違います。私たち夫婦はよく焚き口を開けたまま暖かい薪の炎の柔らかな動きを眺め、太古の昔、人類が親しく火と心を通わせるようになった気分を味わいながら、食事をするようになりました。

釜の上には鍋の二つ三つは楽に乗せて置けるスペースがあります。隅に水を入れた大きな鍋が常時置かれており、火がある間は何時もお湯が沸いておりますから、洗い物や洗面のお湯は何時でも使うことができるのです。薪を焚くようになって我が家のガスの消費は大幅に減りました。

釜の上の鍋のなかには時間を掛けて煮込まれているジャガイモやニンジンなどの根菜野菜が、おいしそうな香りをただよわせています。

**快適な環境に保たれた室内、燃える薪の炎の動きを眺め、薪のはぜる音を聞きながら、ワイングラスを片手に、静かに降る雪が、森の木の枝の上に白い衣を着せるのを飽かずに眺める。  
明日訪れる友のためにポトフの用意をしよう。**